

2月14日「信頼する力」マタイ福音書14：22～36

イエスがガリラヤ湖のほとりで大勢の人たちに神の国について伝え、病気を治し、男性だけで5000人の人たちと5つのパンと2匹の魚を分け合った出来事のすぐ後です。イエスは弟子たちを船に乗せて、先に向こう岸へと渡らせました。そして、群衆を解散させられました。イエスは人々を解散させてから、祈るために一人で山を登ったと言います。イエスは共同体を大切にされましたが、あえて孤独になり、一人で考え、祈る時間もとても大切にされたのです。さて、イエスが一人きりで祈っている間に、弟子たちの乗った船は湖の真ん中で立ち往生していました。嵐のような風が吹き、動けなくなってしまったのです。見かねたイエスは、船のところまで湖の上を歩いて！？行かれました。もちろん、弟子たちは驚きますが、イエスは語りかけます。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」船はいろんなものを暗示します。私たちの人生、教会そのものかもしれません、どれほど大きな逆風の中であってもイエスは必ず共にいてくださること、「恐れるな」と呼びかけてくださること、今日の物語は「信頼」することの大切さを私たちに教えてくれます。

もう一か所選ばれていたイザヤ書の預言もやはり信頼について私たちに教えています。30章15節「**お前たちは立ち帰って静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある**」これはユダの国がアッシリアという大きな脅威に悩まされていた時代の預言です。すでにアッシリア帝国は、北イスラエルを滅ぼして、次にユダの国を狙いに定めていました。ユダのようなちっぽけな国に1国でアッシリアに対抗する力はありません。ユダの国にはいくつかの選択肢がありました。アッシリアに降伏する道。たとえ1国でも対抗して戦う道。そして、西の大国エジプトと同盟する道。時の王が取ったのは、西の大国エジプトとの同盟でした。同盟とは言っても対等の関係ではなく、たくさんの貢物をして、エジプトの神々を拝むことによって守ってもらう、いわばエジプトの配下に下るようなものです。イザヤはその道を取った王を激しく批判しました。そして慌てずじっと耐え忍べば必ず神の救いがあることを説いたのです。「**お前**

「**私たちは立ち帰って静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある**」

技術革新や情報化社会の到来によって、私たちの社会ではスピードが速いことに大変な価値が置かれる時代になりました。5G、光回線、少しでも早い情報伝達方法が競われます。スーパーコンピューター、CPU、今やコンピュータの情報処理速度は恐ろしいもので1秒間に1京桁もの円周率計算が出来るようです。とっくに人間を超えています。私たちは少しでも早く情報を手に入れ、少しでも早く決断を下すことが良いことだと思込んでいます。けれども、「速さ」がないがしろにしてきたこともたくさんあるはず。一番早い情報はインターネットですが、ネットニュースの見出しはたった15文字です。その15文字で情報の価値が判断されるので、コピーライターはその部分に最も力を注ぎます。ですが、本当に15文字で情報を見極められるのでしょうか？実際、タイトルばかりセンセーショナルで内容が薄く浅い情報が巷には溢れています。また、情報が早く出すぎるために、正確さがおざなりにされている現実もあります。そうして、出来上がったのが、デマや差別的な言説が簡単に広がっていく浅く軽薄な社会です。コロナ禍はその問題の根深さを浮き彫りにしたと思います。私たちからは、物事を注意深くとらえ、正確に見極める慎重さが失われているのです。私たちは本当に今、静かに心を落ち着くことの大切さを深く深く受け止めなければなりません。

他者の批判は簡単ですが、私にも深く反省すべきことがありました。コロナ禍の中で、一時期、教会に集まったの礼拝を自粛することを決めた際に、私はこう思いました。「教会には高齢の方も多し、一度礼拝に来ない習慣がついてしまえば、礼拝には来なくなる人が増えるのではないか・・・？」これは杞憂に終わりました。むしろ、これまで以上に教会員の方々の熱心な礼拝出席と祈りと出会うことになりました。皆さんの信仰を疑った私自身の弱さと罪深さを思い知らされた出来事でした。強い風に恐れて沈みかけたペトロを叱られる主イエスの言葉が刺さります。「**信仰の薄い者よ！なぜ疑ったのか！**」今週の水曜日からはいよいよ受難節（レント）が始まりますが、コロナ禍という酷い逆風の中で、何よりもイエス

に信頼し、互いに信頼し合うことが大切な中、真っ先に他者を疑い、イエスへの信頼からかけ離れていた自身の罪を悔い改めたいと思います。

さて、二つの物語は確かに信頼の大切さを教えてくれます。たとえば酷い逆風の中にあっても、たとえば大国からの武力による侵略に悩まされようとも、「**信頼していることにこそ力がある**」と。ただ、二つの物語が要求することは難しい面もあると思います。弟子たちの中には、ガリラヤ湖を本拠地とした熟練の漁師たちもいたはずなのですが、その知識も技能も全く通用しないような大嵐だったのです。ユダに迫っていたのは、とてつもない脅威です。だって、目の前で同じユダヤ民族の国北イスラエルが滅ぼされてしまったのですから・・・弟子たちが、時のユダの国の指導者たちが、気が動転して、右往左往してしまうのも、仕方無い面もあるかと思うのです。そういった意味では、ペトロのエピソードは私たちに叱責する物語でもあります。励まし、慰める物語でもあります。使徒だって、もっと言うならば一番弟子のペトロですら、疑い、迷いの中で、本当の信仰へと導かれて行ったのです。

今、木曜日の祈祷会では出エジプト記を読んでいます。礼拝とは違い 1 章ずつ丁寧に読んでいきますから、結構議論も深まります。ある時「出エジプト記の出来事はどこまで史実か」というかなり難しい議論にもなりました。聖書では、何人のイスラエルの人々がエジプトを脱出したと書いてあるかご存じでしょうか？成人男性だけで 60 万人とあります。ということは、配偶者に子どもたちを加えて 3~4 倍すると、200 万人近い人々が一斉にエジプトから海を渡って移動したことになります。どう考えても現実的に不可能なので、聖書の記述がどこまで史実を現しているか、ということやはり考えなければなりません（この話をもっと詳しく知りたい人は、是非木曜日の祈祷会へご出席ください。笑）今日の福音書の物語でもイエスは湖の上を歩いて渡ったとありますが、実際にそんなことが出来るのか・・・科学的に証明することは不可能です。

信頼すること、信じることにはとても大きな力があります。それは本当だと私は思います。けれども、言われたこと、書かれたことをそっくりそ

のまま鵜呑みにするのがホントの信頼か・・・という私は少しクエスションです。それは信頼と言うよりは、妄信とか、隷属とかいうのではないのでしょうか？先ほどの情報についてもそうですが、その情報が本当に信頼できるものなのかを確信するためには自分の頭で考え、悩む忍耐と時間が必要です。私が神学部で学んだことは、聖書の記述を、自分のこれまで積み上げてきた信仰を一度徹底的に疑ってみることです。それでも残ったところに本物があるのです。矛盾するようですが、本当の信頼、信仰とは実は疑いの先にあるものなのです。

ペトロのエピソードはその大切さを教えてくれます。あのペトロでさえ、弟子たちのリーダーとして後の教会を導き、天国のカギを与えられたペトロでさえ、疑い迷ったのです。聖書は語ります「**強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、『主よ、助けてください』と叫んだ。イエスはすぐに手を伸ばして捕まえた**」強い風に恐怖し、疑い、迷う弱い私たちです。それでも、沈みかけて「主よ、助けてください！」と叫ぶならば、イエスはすぐに手を伸ばしてくださるのです。私たちのこの愚かな手をしっかりと握ってくださるのです。イエスには疑い迷う、私たちの弱さは織り込み刷りで、それでもしっかりと手を取って引き上げてくださるのです。

今週からいよいよレントが始まります。私たちはイエスの受けられた苦しみを覚えて、節制と悔い改めと祈りの日々に入ります。改めて、心落ち着けて静かにすること、そして主イエスに信頼することを考えたいと思います。信頼のためには時間がかかります。むしろ時間をかけなければ本当の信頼にはなりません。皆さんにとってこのレントの時が、神さまへの信頼と信仰を深め、新たにする時となりますように、心から祈ります。